

中世のロマン

三加和町

玉名郡の北部に位置し、福岡県と境を接する三加和町。筑紫山脈の支脈に囲まれ、山林が町の約半分を占める。山あいの町である。山には竹林が多く、やわらかな緑がたたかいた。町を流れる岩村川、十町川、和仁川の周辺には水田が広がり、山手にはみかん畑が続く。

中世の頃、肥後国衆一揆の最後の舞台となったこの町は、人口約六千八百人。緑豊かでのどかなたたずまいの中、歴史のロマンが秘められている。



肥後国衆まつり

ロマンの舞台・田中城

町役場前の県道を、真っすぐ南関方面に向う。右手に「田中城跡」の案内板。それに従って細い坂道を登っていくと、斜め前方に小高い丘が見えてきた。

田中城は、石垣や天守閣を備えた近世の城とは異なり、自然の丘陵をそのまま利用した中世の代表的山城である。戦国末期、肥後の国主佐々成政が、当時太閤秀吉から禁止されていた検地を実施しようとした。これに対し、各地で国衆（武士団の頭領）による反乱が起った。「肥後国衆一揆」である。

三加和町でも、この辺り一帯を領有していた和仁氏一族が、ここ田中城に立て籠り、約二ヶ月にわたって佐々軍と交戦。天正二五（一五八七年）十二月六日、城内の裏切りにより落城した。三加和町では、毎年二月十一日（建国記念の日）に、この戦を再現した肥後国

衆まつりを開く。

この一揆により肥後の国衆の多くが滅亡し、肥後の中世は終焉を迎えたといわれる。

城壁の役目を果たした切り立った岩肌に沿って歩くと、遊歩道にさしかかる。両端にコスモスが揺れる坂道を登っていく。少しすると栗林の脇に「邸宅跡」という標示板。中世の昔、城主は平時この場所で生活し、戦になると頂上の城に立て籠って敵と戦ったという。

遊歩道を上がり切ると左手は土の壁となり、この上が本丸跡である。壁ぞいにぐるりと歩く。行きついた先は急に下に落ち込んでおり、右手の土盛り上には物見やぐらの跡。聞くところによると、今歩いてきた道は空堀の底だという。空堀は本丸を囲み、そのまま自然の断崖に連なっている。自然の地形を利用して築かれた、軍事的色彩の強い城であることがわかる。

左手の土壁の大手門入口を登り、平

垣に切り開かれた本丸に出る。東屋が一軒ぼつんと建ち、発掘された跡地は一面にコスモスが植えられている。調査によって、建築時期の異なる十四の建造物跡も確認されたそう。

遺構の保存状態が良く、県指定文化財になっている。中世のロマン「田中城」。



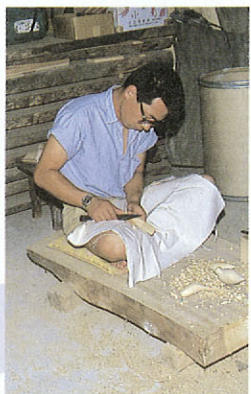
田中城 岩壁に彫られた唐蓮仏。室町末期の彫刻といわれる。中央が閻魔大王。左右に六地藏が配してある。

同時に、城跡に向う道の入口に戦国資料館を建設。この周辺が戦国歴史・史跡ゾーンとして、三加和町がすすめる町おこし事業「和仁古城の里づくり」の拠点となる予定である。



田中城跡

自然を感じて生活する森の人



再び役場前を通り、今度は山鹿市へ向う道の途中、舗装してない山道をカタゴト車を揺らしながら登って行く。山の中腹が開け山小屋風の家が一軒建っている。ナイフカービングに取り組んでいる上妻利弘さんの「森の家」だ。四十畳程の広い板張りのホール、土間風のアトリエ、風が気持ちよく吹き抜けるリビング。三加和町の大部分が展望でき、抜けるような青空を滑走する鷹の姿を見ることが出来る。全てが自然の中にあるという実感。手足が指の先までゆっくりと伸びていく感じがする。

ここにはナイフカービングの仲間だけでなく、自然と関わり、自然を愛する人達が全国から集ってくる。上妻さん自身、こうして様々な人と出会い、語り合うことを何よりも大切にしている。また、「森の家」を実際に自然に触れ、自然を学ぶ場所として利用して欲しいとも考えている。夏休みなどには、県内の小中学生を泊めて、ナイフカービングの指導をしたり、野鳥・野草の観察などをしたり、自然の中でおもいっ



上妻利弘さんの「森の家」

